

『グレース・オブ・モナコ
公妃の切り札 - Grace of Monaco -』

(2014年公開) ※DVDレンタル・配信・販売あり

アカデミー女優グレース・ケリーとモナコ大公
世紀のロイヤルウェディングから6年後を描く

1956年4月4日、「コンステイ
テューション」号は数万人の民衆
が見送る中、一人の花嫁を乗せて、
ニューヨーク84埠頭を出港した。
花嫁の名前はグレース・ケリー、
職業は女優。前年5月に訪れたカ
ンヌ映画祭で知り合い、文通を通
じて親交を重ねてきたモナコ大公
レーニエ3世に嫁ぐための渡航だ。

「出発の日、船は霧に包まれてい
たせいか、まるで自分がどこか知
らないところに連れていかれる気
がしました」とケリーは後に語っ
ている。ニューヨークの4月は天
気の予想が難しい。雨が降りやす
く湿っぽくなりやすい季節である
が、気温は寒さも和らぎ始める頃。
なので、海に近いニューヨークで
は霧が発生しやすいのだ。この日
も朝から雨が降っていた。

公国モナコへの渡航に船を選ん
だのは、ケリー自身だったと言わ
れる。出会った後は「白鳥物語」、
クリスマスにプロポーズを受けた
後は「上流社会」の撮影で多忙を
極めたケリー。結婚前に女優でも
ない花嫁でもプリンセスでもない、
ただ一人の娘ケリーとしての時間
が欲しかったのだろう。

「コンステイテューション」
号で8日間の花嫁渡航

花嫁渡航に選ばれた「コンステイ
テューション」号は1951年6
月に竣工。ケリーが20歳の駆け出
しの頃に宣伝写真のモデルを務め
たことがある、縁深い船だ。しか
し「コンステイテューション」号
にすんなり決まったわけではない。

ゴール大統領に過酷な課税を強要
され、承諾しなければ「モナコを
フランス領にする」という声明ま
で出され、存亡の危機に陥っていた。
撮影のために、レーニエ3世が

ケリーに贈った婚約指輪など5つ
のカルティエジュエリーを、公国
モナコの同意の下、カルティエの
アトリエで完璧に複製したり、ケ
リーが実際に訪ねた場所で撮影さ
れたり、カンヌ国際映画祭オーブ
ニング上映が決定したり。公国モ
ナコ公認映画として進んでいたは
ずが、「母が美化され過ぎ。父は指
導者として一方的で弱く、妻を束
縛する男として描かれている」と、
ケリーの長男であり現モナコ大公
アルベール2世が激怒。脚本など
の変更を要望したが、聞き入れら
れなかったという。

オーブニング上映会にはロイヤ
ルファミリーはボイコット。その
おかげで、作品はますます注目と
なり、モナコ公国への関心も高まり、
観光客も増えたことだろう。モナ
コ公国の主な産業は観光。このボ
イコット話も実はシナリオ通り、
だったのかもしれない。

(クルーズ映画ライター あいさわみき)

多大な宣伝効果が見
込めると名乗り出て
きたイタリア・ライ
ンなどの激しい競争
の結果、勝ち得たの
が「コンステイテュー
ション」号だった。

予約で満員だった
4月4日の乗船客を
多数他船に移し、ケ
リーの家族親戚友人
など結婚式参列者90
人に1等とキャビン
クラスの客室を提供。
報道陣や一般客も乗
せて、8日間の旅が
始まった。独身最後の時間は、報
道陣の目もあり、結果的には休まっ
たものではなかっただろう。心を
癒してくれたのは、一緒に渡航し
た黒のブードル、愛犬オリバーだっ
たに違いない。

「コンステイテューション」号は、
ニューヨークからイタリアへの外
航定期船なので、モナコへは臨時
寄港となる。モナコ港外に到着す
ると、レーニエ3世の船「レオジュ
バンテ」号が歓迎の船とともに近
づき、ケリーと愛犬オリバーを乗

公国の危機を夫とともに乗り越える
ケリーを演じるニコール・キッドマン

(イラスト：吉崎 英二郎)

せ換えて公国へとエスコートした。
いち早くケリーを見たい国民たち
は、灯台がある埠頭に駆けつけた。
港では祝砲が撃たれ、空からはカー
ネーションが数千も舞い降りてき
た。当時の報道映像も見られるのが、
今回紹介する映画「グレース・オブ・
モナコ 公妃の切り札」である。

公国公認映画が一転
ロイヤルファミリー激怒

世紀のロイヤルウェディングか

ケリーの息子嫁、現モナコ公妃シャルレーヌが
「セブンシーズ・エクスプローラー」号のゴッドマザーに

2016年7月13日の夜、モナコ
で「セブンシーズ・エクスプロー
ラー」号の進水式が行われた。ゴッ
ドマザー(命名者を務めたのが、ケ
リーの長男であるアルベール2世
の妻、現モナコ大公妃シャルレー
ヌ。公妃が赤いベルベットのリボン
にハサミを入れると、シャンパンボ
トルが船体に叩きつけられ、船は無
事「洗礼」を受けた。

シャンパンなどのボトルを船体に
叩きつけるこの儀式的ルーツは、古
代ローマまで遡ることができる。そ
の頃はワインで、船を清める意味が
あったそうだ。日本ではワインでは
なく日本酒の場合もあるという。2
014年にエリザベス女王がゴット
マザーを務めた空母「クイーン・エリ
ザベス」の進水式では、シングルモル
ト・ウイスキーを使っている。

進水式の支綱切断の儀式は、古く
は斧が使われ、その船ごとに新しく
作られていた。日本では「悪魔を振
り払う」とされる銀の斧を使うこと
が多い。最近のイギリスでは、ボタ
ン一つでボトルが船体に向かって
いくようにセットされたものもよ
く見られる。

さて、「ゴットマザー」と言うが、

女性が務めるようになったのは、1
811年からのことで、当時のイギ
リス皇太子ジョージ4世が軍艦の
進水式で女性に依頼したことから
とされている。ゴットマザーとして
一番出番が多いのは、やはりエリザ
ベス女王だろう。前出の空母のほかに
キューナード社「クイーン・エリザ
ベスII」号、「クイーン・メリーII」号
でも務めている。

歴代のキューナード社の船はイギ
リス王室の女性が命名者になって
おり、先代の「クイーン・エリザベ
ス」号はエリザベス皇太后、「クイ
ーン・メリー」号はメリー王妃、新しい
ところでは「クイーン・ヴィクトリ
ア」号はチャールズ皇太子妃カミラ
夫人が務めた。この時、事件が起
こった。シャンパンボトルが割れな
かったのだ。進水式でボトルが割れ
ないと、その船は不幸になるとい
うジンクスがあるだけに、スタッフが
すぐさま代わりの瓶をぶつけて割
り、無事命名式が終了した。

故ダイアナ妃はプリンセス・ク
ルーズ「ロイヤル・プリンセス」号(現
アルテミス号)を担当した。それに
倣ってか、新造船「ロイヤル・プリンセ
ス」号はキャサリン妃が務めている。